

## "Idiots First" の3つの相

著者	井崎 浩
雑誌名	宮崎大学教育文化学部紀要. 人文科学
巻	28
ページ	1-12
発行年	2013-03-29
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10458/4526">http://hdl.handle.net/10458/4526</a>

## “Idiots First” の3つの相

井崎 浩

### Three Phases of “Idiots First”

Hiroshi IZAKI

#### 序.

Bernard Malamud (1914-86) の短編小説 “Idiots First” (1961) は多くの批評家から、例えば “great story” (Solotaroff 71)、 “a successful allegory” (Friedman 20) のように高い評価を受けているものの、あまり詳細には論じられては来なかった。それはイディッシュの古い民話をもとに書かれ (Bellman 25)、アレゴリカルな設定であることを強く思わせながら、“placing comparatively real characters in wildly imaginary gardens” (Richman 125) という側面を持つことなどに起因しよう。“The Angel of Death” (Siegel 133) としか思えない人物が跋扈し、夢の世界を表現したとも考えられる出来事が頻発する一方で、ほかのもっとリアリスティックな小説にも見られない、異例なほどの声高な社会的主張がなされているのも事実である。そのあからさまな主張の強さは、他に比する短編はなく、あるとすれば、*The Fixer* (1966) や *The Tenants* (1971) などの社会的関心を前面に出したともいえる長編小説において語られたものに匹敵する。そうしたことから、“a certain amount of confusion is generated with regard to the ultimate meaning of the story itself” (Ziegelman 91) といった事態が生じているようだ。そこで、本稿では、上記のことを踏まえ、この短篇小説を単一の相の下に考察するのではなく、あえて複数の相の下に捉えて検討する。それによって、“Idiots First” の新たなる読みの可能性の一端を提示したい。

#### I. 神との闘い

“Idiots First” は “Angel Levin” (1955)、 “The Jewbird” (1963) といった短篇と並んでアレゴリカルな性質を強く帯びており、それは Sidney Richman がこの短篇の作者としてのマラマッドを “an East Side Bunyan” (Richman, 125) と呼んだことにもあらわれていよう。一夜のほんの短い時間を描いたミニドラマではあるが、バニヤンの『天路歷程』をもどこか想起させる書きぶりであるのは確かだ。死を目前に控えた老人 Mendel が知的障害を負った39歳の息子 Isaac を庇護してくれるカリフォルニア在住の叔父のもとへと送るために、死んだも同然の体に鞭打ち、痛みを

こらえながら、いわば人生最後の闘いとでもいうべきものに挑んでいくが、その彼を取り巻く世界はGinzburgという人物の姿をした“The Angel of Death”が影のように付き纏う、11月とはいえ極端なまでに暗く荒涼とした都会であり、その凍えるような寒さは容赦なくMendelとIsaacに襲いかかる。Isaccを送り出す旅費を工面するにあたっては、手許にある70ドルに加えて、どうしても残り35ドルが必要なのだが、かつて60ドルで購入した金時計を質屋に持ち込んでも8ドルにしかならない。質屋もIsaacの障害を見ては取るものの、“Isaac must go to my uncle that he lives in California.”、“...but where will I get the rest till night”と苦境を訴える、見るからに“dying man”でもあるMendelに取り合おうとは決してせず、“So go to Rothchild” (274)<sup>1</sup>と冷たく言い放つ。Mendel親子は、“an iron gate – rings and gold watches glinting through it – was drawn tight across his place of business” (277)とあるように、質屋のショーウィンドーと彼らを仕切る鉄のよろい戸が象徴するビジネスの論理に跳ね返される。

ほかに金に換えるものとしてないMendelが次にぎりぎりの望みを託すのは大富豪の慈善家であるFishbeinであった。だが、ようやくのことでFishbeinの豪邸に辿り着き、自分に残された時間はなく、どうしても障害のある息子を庇護してくれる場所へと送らなければならない状況を“...it's life or death –” (275)と必死で訴え、35ドルの援助を求めるMendelに浴びせられるのは、“I never give to unorganized charity.”、“Private contributions I don't make – only to institutions. This is my fixed policy.” (277)という、慈善家としてのFishbeinの論理であった。FishbeinもIsaacの問題を見はするが、施設(“an institution”)へ送ればいいのではないかと、息子の安寧を必死になって求めるMendelにはとうてい受け入れがたい言葉を投げつけるのみである。

昔の友人のもとを訪ねもするが、その友人は何年も前に亡くなっていたことを知り、“The Angel of Death”が告げたMendelの死の刻限が迫る中、最後の望みを絶たれた親子は寒空の中凍え死ぬような思いをするばかりである。だが、ふと古いユダヤ教会を目にしたMendelはその門を叩き、年老いて痩せさらばえたラビに窮状を訴え35ドルの援助を願い出る。質屋やFishbeinとは違い、Isaacに偏見の目を向けることのないラビはその訴えを聞き入れ、貧しい生活の中で唯一金に換えられるものとして新品のコートを与えようとする。しかし、その際にもラビとは違ってでっぴりと太ったラビの妻がそれを阻もうとする。ラビの妻はIsaacを見てあからさまな嫌悪感を示して目を背け、Mendel親子の苦境に譲歩しようとはしない。最後は取り合いとなるが、ラビが心臓発作を起こし、それを見た妻が動転する隙にMendel親子はコートを持って駆け出す。そのとき、発作の苦悶の中にあっても、ラビは二人に「早く行け！」(279)と言ってくる。

最後の最後で慈悲を得たMendelたちだが、このあと場面は急に駅の改札口へと飛ぶ。あれほど繰り返し言及された35ドルの入手がどうやって行われたか、つまり深夜なのにラビのコートをいかにして換金できたかという現実的な問題にはなぜか一切触れられないままストーリーは進むことになる。

なんとかカリフォルニア行きの乗車券を買うことができ、あとはIsaacを無事に列車に乗せるだけだが、そこに改札係の姿をしたGinzburgつまり“The Angel of Death”が立ちはだかるのである。Mendelをはじめそれに気づかず、列車はまだ発車していないのに“too late”だという改札係に必死で“With my whole heart I beg you this little favor.”と改札口を開けてくれるように訴える。だが改札係は、“Favors you had enough already. For you the train is gone. You shoulda been dead at midnight. I told you that yesterday. This is the best I can do.”(279)と言い放つ。ここに及んで

Mendelは相手がGinzburgだと気付く。それを知ってもなお懇願するMendel とそれを嘲笑うかのようなGinzburgとの応酬は以下のものである。

“For myself,” the old man begged, “I don’t ask a thing. But what will happen to my boy?”

Ginzburg shrugged slightly. “What will happen happens. This isn’t my responsibility. I got enough to think about without worrying about somebody on one cylinder.”

“What then is your responsibility?”

“To create conditions. To make happen what happens. I ain’t in the anthropomorphic business.”

“Whatever business you in, where is your pity?”

“This ain’t my commodity. The law is the law.”

“Which law is this?”

“The cosmic universal law, goddamnit, the one I got to follow myself.” (280)

老いたラビが自らの死と引き換えにするかのように示した慈悲をも無にし、Mendelを徹底的に突き放すGinzburgとは、この小説のアレゴリカルな設定においては、実は彼の言う“cosmic universal law” そのものが形象化したものだといっても過言ではない。Mendel親子のような弱者を追い詰め「彼らを破滅に導いてしまう」(Davis 3) この世界のありようであり、“what it means human?” (280) という叫びにも一切意味がない“divine indifference in the face of human suffering” (Salzburg “Introduction” 3) とでも呼ぶべきものの化身として、“the human animal’s radical homelessness in the world” (Solotaroff 70) をMendelに思い知らせる存在なのだ。注意してみれば、実は最後に改札係の姿をとって現れるGinzburgと、それまでにMendelが助力を求めた(ラビを除く)人間たちには次のような容姿そのほかの共通点がある。改札係としてのGinzburgは“a bulky, bearded man with hairy nostrils and a fishy smell.” (279)、“The voice was metallic, eyes glittered...” (280) と描写されるが、質屋は“...red-bearded man with black horn-rimmed glasses, was eating a whitefish at the rear of the store.”(274)、Fishbeinは“a paunchy bald-headed man with hairy nostrils...” (275)、コートを取り合うラビの妻については“Her eyes glittered.” (279) と記されていた。この点を捉えてLouis A. Ziegelmanは次のように述べる。

Ginzburg is none other than a composite of Mendel’s three earthly antagonists : the pawnbroker, the philanthropist, and the rabbi’s wife. Thus they have served, essentially, not as characters in their own right but as harbingers of Mendel’s predetermined failure, as emanations of death itself. (92)

つまり、Mendelはこの夜の道中、無機質な“metallic”な声で“cosmic universal law”を“the law is the law”と“mechanistic” (Ziegelman 92) に適用するGinzburgの言葉をずっと聞かされていたも同然なのだ。さらに“Idiots First”には、時計ないしは時間への言及や示唆が数多く見られるが、それはMendelに迫りくる死とIsaacの目前に迫る破滅を強く意識させるものとして機能しており、この短篇自体が“a race against the clock, or more appropriately a battle with time” (Bryant “Isaac’s Arithmetic” 26) の様相を呈する<sup>2</sup>。不可逆的に進行する時間は彼ら親子のいわば「必然」(Hershoinow 127)としての敗北という結末へ向けて無慈悲に過ぎていく。たとえラビの慈悲を得ても、彼らの運命はあらかじめ決まっている、ないしは決められている(“predestined”

“predetermined”) といわんばかりに (Ziegelman 92)。だからこそ、最後の駅の場面で、本当は時間切れだがおこぼれだともいうように、Ginzburgは自分の告げた死の時間を過ぎていながらもかかわらずMendelの寿命をほんの少しだけ延ばし、Isaacが列車には乗ることのできない結末、つまりIsaacに未来がないことを楽しむかのようにMendelに思い知らせようとするのである。そうしたところで、Mendelの敗北はGinzburgにとって自明の理に過ぎないからだ。

だが、ここで驚くべき逆転が生じることになる。なんとあらかじめ決められていたはずの「結末」のシナリオが以下のように変わるのである。

Clinging to Ginzburg in his last agony, Mendel saw reflected in the ticket collector's eyes the depth of his terror. But he saw that Ginzburg, staring at himself in Mendel's eyes, saw mirrored in them the extent of his own awful wrath. He beheld a shimmering, starry, blinding light that produced darkness.

Ginzburg looked astounded. “Who me?”

His grip on the squirming old man slowly loosened, and Mendel, his heart barely beating, slumped to the ground.

“Go,” Ginzburg muttered, “take him to the train.” (281)

『旧約聖書』における『ヨブ記』や、天使と格闘し最後には祝福を得るヤコブの挿話を思わせるこの逆転は“incredible” (Ziegelman 92) な面を持つかもしれないが、Robert W. Warburtonが、“Even the cosmic law can be changed under the influence of man's precarious and tenacious hold upon life.... It is Mendel's compassion that reveals and fulfills the divine compassion, as though only in man's suffering and struggle can God's love and redemption be known and experienced.” (414) と述べるように、ぎりぎりのところで、“cosmic universal law” という “the inevitabilities of natural law” (Richman 127) から抜け出し、“providential fate” (Abramson 134) をも変えうることを示唆するものだとはいえよう。この点について、A. W. Friedmanは以下のように指摘している。

For Malamud, man has nothing but the misery and intensity of his suffering – but the point is that it *is* intense; he is committed to it because it defines his uniqueness, his humanness. As a consequence, he can – at least odd moments – impose meaning where God has not. He can make the universe take notice of him and pay attention to his claims. (291 強調原文)

これはMalamudの “...it is man's struggle that makes God take pity. It is when God – or something like God – looks into man's eyes and sees his own fury reflected in its effect on the human condition, his own cold reflection in man, that he then lets go.” という「宗教的信念」 (Davis 255)<sup>3</sup>の表明にも思えるが、この短編のありえない逆転の衝撃は、“Malamud's theme of compassion, charity, and sacrifice” (Hershinow 127) を端的に感じさせるものとして強い読後感を残すものであることは間違いのない。以上のように、この短編はアレゴリカルな特性を持ち、それを生かして神ないしは神的なもの姿を通して表現されるこの世界の不条理性に挑戦する意欲作であるのだが、また別の相の下に読むこともできる作品である。次節では、その読みの試みを行いたい。

## II. Ginzburgはどこにでもいる！

“Idiots First”発表以前のMalamudの初期短編においては、習作時代を除けば舞台となる年代が明示されることはなかった。そのことはMalamudの初期短編群では大きな特徴となっている。場所的な記述も極めて希薄なため、そうした作品群でMalamudの生み出す世界は“timeless”、“placeless” (Roth 127)な様相を呈し、その結果、現代アメリカでありながらそれとは別の世界、異なった可能性や価値観を示唆するものとなっている。

その雰囲気や濃厚に残しつつも、“Idiots First”において1905年と明示されたことの意味は大きいと言わざるをえない。この年代記述によって、Malamudの初期短編の場合、アレゴリカルな設定のみでなく、作品の舞台となっているであろう1960年代初めまでの半世紀を超えるアメリカの歴史、経済状況や社会の変遷までもが視野に入ってくるからである。1905年とはこの短編ではMendelが質屋に持ち込んだ金時計を買った年であるが、歴史上、アメリカに大量に東欧ロシア系のユダヤ系移民が流入した時代でもある。Mendelもその一員であったものと思われるが、死を目前にしても、移民してきた時期に入手したこの金時計以外になにも財産らしきものがないことが、Mendel自身が“All my life,... what did I have? I was poor. I suffered from my health. When I worked I worked too hard. When I didn’t work was worse. My wife died a young woman. But I didn’t ask from anybody nothing.” (280) と語るようなこの半世紀の彼の苦難を物語っている。大恐慌の時代を挟みつつ、急速に資本主義経済の矛盾が噴出していく時代のなかでMendelがさらされてきたであろうさまざまな苦難をなぞるかのように、この一夜の出来事はMendelを突き放す。この夜に出会う人々の言動は、まるで彼の生涯においてアメリカの社会から受けてきた仕打ちを再現するようなものだ。金銭的に価値があるものにはしか興味を示さず、Mendel親子の苦境に何の関心もなく、もちろん慈悲心のかげらも見せることのない質屋の語るビジネスの論理は長年にわたってMendelの前に立ちふさがってきた障壁であったろう。慈善家としてのFishbeinによる拒絶は貧富の差の中で絶えず置き去りにされてきたMendel親子の境涯を象徴する。Fishbeinはいわば“the Representative of an Institution” (Helterman 12 強調原文) として機能している一面があるが、こうした“institutions”の振る舞いは、往々にして“rigid and inhuman in practice”であり、Fishbeinの拒絶とは、“he has institutionalized all his charity” (Helterman 12) であるからにはほかならない。「慈善もビジネスと同等に扱う」(275) Fishbeinに象徴されているのは、経済の論理が優先される世界にあるの国家や組織のありようであり、Mendel親子、特にIsaacのような存在は置き去りにされるほかはない。一方、ラビの妻はMendel親子と貧困を共有するが、類似した境遇の中にありながら共感する姿勢を著しく欠いてしまっている。たとえ同じような境涯にある同胞同士であっても救いの手を差し伸べられないほどにまで精神をすり減らしてしまうような社会の過酷さがその背景にはある。

このように、Isaacの救済を求めて彷徨うMendelに突きつけられるのは、Isaacのような存在には居場所がないような社会のありようだったといつてよい。Ginzburgとはまさにそうしたこの世界のありようそのものを端的に形象化してあらわしたものだ。ただ、Ginzburgは“The Angel of Death”であり、そういう意味では、人間ではない存在である以上、彼の言動が極端に冷酷なのは当然だとして棚上げにもしうると考えられもしよう。ところが、その“The Angel of Death”と上記の3人の言動の共通点を見逃すわけにはいかない。GinzburgはIsaacへの慈悲心を決定的に欠くが、質屋とFishbeinはIsaacを見て全く同じ言葉“What’s the matter with him?” (274, 276)

を口にし、Fishbeinは“halfwit”(276)とまで言う。ラビの妻はあからさまに目を背ける。こうした態度はIsaacのような存在への配慮を決定的に失い、切り捨て、理解しようとしめないという点でGinzburgとの差はないといってよい。特にFishbeinの“fixed policy”という援助の拒絶に際して発せられる言葉は、Ginzburgの“the law is the law”に呼応するものだ。Isaacを間にはさみ、Mendelとラビが“party of human concern”であるならば、質屋、Fishbein、ラビの妻はGinzburgと同じ“party of indifference”(Solotaroff 70)に属し、いわば“The Angel of Death”の側に立っていることになるのだ(Solotaroff 71)。質屋、Fishbein、ラビの妻ともにそれぞれの理屈はある。質屋にとって、ビジネスはビジネスだし、Fishbeinは“institutions”以外の個人的な寄付はしないと云うが、そんなことをしていればきりがないのも事実だろう。ラビの妻にとっては貧しさの中で(ラビの妻とはいえ)自分たちの生活で手一杯であり、ラビの通常の職責を超えてさらに貧しくなるなどということは許容しがたいということになろう。どんなに悲痛な訴えを聞こうとも、Ginzburgのいうように“You ain't the only one...some got it worse than you.”(280)と答えてしまえばその訴えに耳を貸す必要はなくなってしまふ。しかし、それでもなお、Isaacの未来に一切関心を示さないということは、どこかで決定的に欠如したものがあつたことをこの小説は告発する。彼らの態度は、いわばGinzburgのいう“What will happen happens. This isn't my responsibility.”というセリフにみられるものと通じ、“The Angel of Death”とともに“nonhuman”(Solotaroff 71)の側に身を置いていることと同じだからだ。Isaacの破滅と似たような出来事、いやそれ以上に悲惨かもしれない出来事は世界中に溢れている。それを見聞きするとき、心のどこかで“What will happen happens. This isn't my responsibility.”と嘯くならば、ひとはみな、質屋、Fishbein、ラビの妻と同じく“The Angel of Death”と同列の存在になる可能性がある。この短編が突き詰めて提示しているのはまさにそのことなのである。

GinzburgはIsaacへの援助を求めて苦難の道のりを行くMendel親子の後を影のように追うが、場合によってはさまざまな姿を取って彼らの周囲に現れる。ある時はカフェテリアで食事をする男、またMendel親子が立ち寄った公園で声をかける見知らぬ男、そしてラビのもとを去る彼らのあとを足音も立てずに追う“The Angel of Death”として、そして最後には改札係として現れる。これは“The Angel of Death”の超自然的な遍在性を表現してもいようが、見方を変えれば、“The Angel of Death”としてのGinzburgはいわば、「どこにでもいる」「だれにでもなる」。Mendelの“what it means human?”という叫びを無視し忘れ去ろうとするとき、ひとはだれでもみなGinzburgに「なる」のである。Isaacの苦境に目を背け、ラビが与えた慈悲を無にしようとするラビの妻の目がGinzburg同様“glittered”だったのはまさにこのことを物語っている。戯画化された質屋、Fishbein、ラビの妻、そして“The Angel of Death”として描かれるGinzburgの言動に心理的に距離を感じていたであろう読者が、彼らと自分たちの間になんらかの共通点を見出し、特にGinzburgの論理と完全には無縁ではないかもしれないことに気付いたとき、結末部分においてGinzburgの発する“Who me?”(281)という問いは読者自身にも突きつけられる。

ラストシーンにおける逆転とは、Ginzburg的なものが“overwhelmed by the moral outrage”(Helterman 16)の瞬間だが、“The Angel of Death's decree”を劇的に変えることはできたものの、たとえばFishbeinなどの心を動かすことはできなかったという点でこの小説におけるある種のペシミズムを指摘することもできよう(Abramson 134)。確かにMendelの訴えを拒絶した3人の変心が描かれることはない。だが、“The Angel of Death”をも突き動かすことができるのであれば、彼らとて変わりうるはずだという逆説は成り立つ。実はその点にこそ、Malamudがこの

小説に込めた“sanctity of human life” (Hicks 15) への希望を我々は見て取るべきであろう。

この小説にあらわれる1905という年数の記述は、既に触れたように、この作品にアメリカ社会の歴史的パースペクティブを持ち込むものだ。それによって、アレゴリカルな、神的なものとの格闘がテーマと思われたこの小説に別の相が組み込まれていたことが見えてくる。Mendel親子の苦境を訴えられた質屋は、アメリカではそんなことは当たり前だといわんばかりに皮肉を込めて“*It’s a free country.*” (274) と口にする。これもGinzburgの“*That’s how it goes in this country.*” (280) という言葉に呼応するものだが、実はこの小説で告発されているのは“*what it means human?*”を忘れたアメリカという国のありようでもあり、MendelがGinzburgに向かって発した必死の言葉は、実は神的なものに世界の不条理性の不当さを訴えるだけではなく、極めて激烈な社会批判でもあったのだ。その声高な主張はMalamudの短編小説としては異例のものといっているが、のちの長編*The Fixer*や*The Tenants*にも繋がっていくMalamudの社会的関心の高まりを明確に感じさせるものとなっている。

Mendelが口にする英語には、しばしば、“*When is open the door there we go in the house,...*” (276) のようにユダヤ系移民が話していたイディッシュ語の影響が混入する。これは移民してきてからの彼の貧しさ、教育の機会さえ満足に得られなかった状況を感じさせる。だが、それだけではなく、現代アメリカでありながらそれとは別の世界、異なった可能性や価値観を示唆する作風とも相俟って、アメリカでの常識とは別の価値観、考え方があることを通常の英語とはずれた言葉によって表現したものである。“*what it means human?*”など顧みられない社会、それを当然とみなすGinzburgの側の“*party of indifference*”に対して“*party of human concern*”がもつ異質な発想を象徴するものでもあったのである。

以上のように、この小説はアレゴリカルに描かれた世界の不条理性への挑戦に、痛烈な社会批判が同時に重ねられてもいる。しかし、この小説に特徴的な筆致をさらに検討することによって、実はもう一つの相が潜んでいることが見えてくるのである。

### Ⅲ. 内面世界の旅

暗く閉ざされたような“Idiots First”の世界では、風は悲しげ (“*mournfully*”) に吹き付け、月は見ている間に上っていく (277)。公園の木は振り返る間にその姿を大きく変え (277)<sup>4</sup>、時間も空間も説明なしに大きく飛ぶ (279)。そして“*The Angel of Death*”がどこまでも付き纏う。こうした筆致が生み出すものは、“*a disquieting blurring of the line between reality and fantasy*” (Hershinow 127) であり、その心象風景の色彩の濃い“*dream-landscape*”はまるで“*a never-never-land New York City*” (Richman 124)、“*a vaguely surrealistic dream landscape of dark, deserted streets*” (Hershinow 127) である。いわば夢の文法とでも呼ぶべきものが大きな特徴となっているこの世界においては、“*how much of the action ‘really’ happens*” (Hershinow 127) を判別することは難しい。このことはこの小説のアレゴリカルな性質と深く結びついてもいようが、それだけではなく、作品全体を一つの夢、たとえばEudora Weltyの“*The Death of a Traveling Salesman*”を死に瀕した主人公の夢とみなす解釈があるように (Bande Kieft 81)、Mendelが (場合によっては死の床にあって) 見ている夢ないしは“*Mendel’s desperately fearful imagination*” (Hershinow 127) なのだとする捉え方をも可能にするものである。その観点からみた場合には、このミニドラマにおける出来事や人物たちはMendelの“*troubled inner lives*” (Solotaroff 70) を映し出すも



のであるという新たな相貌を見せてくることになろう<sup>5</sup>。

Mendelの内面世界において、Isaacを守ろうとする彼に立ちはだかる質屋、Fishbein、ラビの妻とは、前節で触れたようにMendelの苦難の人生のなかでアメリカの社会から受けてきた仕打ちを再現するものである一方、そうした生涯の中でついには内面化するに至ったアメリカ社会の非情な論理そのものだといえよう。そのどこか極端なまでに戯画化された言動には、Mendelがラビの妻を思わず「シャイロック！」(279)と呼ぶように、そうした論理の典型的な面を見て取ることができる。長年にわたってMendelを苦しめてきたビジネスや国家・組織の論理、個人的な共感や同情をもすり減らす貧困といったものがMendelの内面世界で人の姿を取って彼の必死の思いを妨げているのである。その取りつく島のないほどの非情さは、Mendelがこうした論理に対していかに無力感を感じながら生きてきたかを物語っている。

この状況の中であって、Mendelはなぜ諦めずにいられるのであろうか。それはひとえにIsaacへの思いの強さであるのは間違いないが、ここで検討しているMendelの内面世界という象徴の相においては、Isaacの存在はまた特別な意味を帯びてくることに注意したい。現実的には、Isaacは庇護されるほかはない存在と思えるが、このMendelの内面世界においては、“what it means human?”をたえずMendelに思い起こさせるIsaacの存在およびIsaacの存在が象徴しているもの、または、そのような存在を守ろうとする意志こそがMendelを絶望や諦めから救い、結果的に、ぎりぎりのところでMendelを“party of human concern”の側に引き留める役割を担っていると思われるからである。財産も社会的地位も持たず命も尽きようとしているのだが、“party of indifference”の側からは決定的に失われているなにかをMendelは持っているということになる。それが、逆にMendelのある種の「強さ」、なんとしてでも諦めない強靱さにつながっている。Mendelが立ち上がれないほどに打ちのめされ、力尽きたかに思える瞬間に、“Isaac assisted his father up.” (276)、“Isaac helped his father up...” (281)と繰り返されるのは偶然ではない。つまり、もっとも弱者であり、庇護されるだけの存在と思われた者が、この内面世界においてはMendelを支え、助けるという逆説が成り立つのである。

数十年間の苦勞の連続の果てに至ったMendelの絶望にも似た心情が反映されていると思われるこの世界だが、完全に暗闇に支配されているわけではない。希望を見出すのが難しい中であっても、Mendelは上空の“the sprinkled sky” (275) や月の輝く“The hole sky is white.” (277)を意識する。さらに、寒さに震えているさなかに、Isaacを庇護してくれるはずの叔父がカリフォルニアの青い空の下でくつろいでいる姿（そこにはIsaacの未来への期待も込められていよう）を一瞬白日夢のように思い浮かべる。その瞬間、Mendelは確かに暖かさを「感じる」(177)のである。Isaacを救おうとする一念に支えられながら、彼はまだ、この凍えるような世界の中であっても、いわば「光」「暖かさ」につながるものを信じている、少なくとも信じようとしているのだ。

このような観点に立つとき、この一夜の旅の意味合いとは、Mendelが自身の内面世界において、Isaacの存在が象徴しているものを破滅から救うよすがの在り処を探求するものだともいえるであろう。長年の辛苦の果てに荒みきった内面の中で、“what it means human?”への回答ともなるべきものをどうしても見つけなければならないのだ。前述の白昼夢の直後に立ち寄る古びたユダヤ教会堂で出会う老いたラビという姿に、Mendelはようやく「光」「暖かさ」に相当するものを見出すことになるが、ここまで片隅に追いやられたところにしか見出せないというところに、Mendelの心の荒廃ぶりを見て取れる。彼の精神に、前節までに検討した世界の不条理性

や社会の過酷さが大きく影を落としているのだ。

“Idiots First”では“business”という語が多用されているが、それは次第に、ビジネスの論理の苛烈さや、慈善家であっても慈善もビジネスと同等に扱うような社会、Ginzburgがいうように“anthropomorphic” (280) なものなど顧みられない社会のありようを象徴する言葉となっていく。そうしたものが形象化されたGinzburgにとっては“pity”ですら「品物」“commodity” (280) 扱いに貶められる。それゆえ、Mendelがラビに向かって切実な願いを伝える際に、“business”ではなく“errand” (278) という言葉が用いられていることは言及に値する。古語の趣ではあるが、この短編で多用される“business”とは異なる「使命」というニュアンスを強く帯びてくるからである。Mendelの象徴的な一夜の旅とは、金銭的な必要を満たすためだけではなく、いやむしろ、まさに、この「使命」—Isaacが象徴するものを守り抜く拠りどころが自分の内面にあるのかを確かめること—を果たさんとするための苦闘だったといっよい。

ここにこそ、すでにI節において指摘しておいた、ラビの慈悲を得た直後のストーリー上の急転の理由もある。そこまでのストーリー展開からするならば、ラビにコートを与えられて終わりではなく、その後、質屋も門を固く閉ざす深夜にあって、短時間にどのような苦勞をしてそれを35ドルに現金化してIsaacのカリフォルニア行のチケットを入手できたかということ自体が問題なはずだからだ。それなのに、そうした現実的な問題はすべて省略される。実は、多くの読者を戸惑わせるこの跳躍的な展開にこそ、今節で検討している第3の相、つまり、夢の文法とでも呼ぶべき筆致によってMendelの内面世界を描いているという側面が凝縮されているのである。Isaacにカリフォルニア行きチケットを購入するために必要な35ドルを入手するという極めて現実的な事柄を中心にストーリーは展開し、そこに世界の不条理性や社会の抱える過酷さがクローズアップされていたわけだが、第3の相の下にこの短編を検討するとき、焦点は、金銭の入手そのものではなく、“pity”といった言葉に代表される、Isaacが象徴するものを尊重する姿勢に当てられていることがより一層明らかとなる。それをMendelが自らの内面世界によく探り当てたことによって、いわば上記の「使命」は果たされたのであり、そのことを強調するために場面の急転が起こったといっよいのだ。

だが、ここに至ってMendelは、さまざまな姿をとって彼を追っていたもの、質屋、Fishbein、ラビの妻の背後にその存在を意識せざるをえなかったであろうもの、たえずひそかに怖れるかのように警戒の視線を送っていた“shadows” (277) に潜んでいたものと直に対峙することになる。それこそが、最後の障壁として立ちはだかる“The Angel of Death”としてのGinzburgである。“What will happen happens. This isn't my responsibility.”という言葉に凝縮されるものをMendelに受け入れるようにたえず唆してきた存在だといっよいが、質屋、Fishbein、ラビの妻への訴えと比較して、このときのMendelの哀願にとどまらない主張の強さは上記の「使命」を果たしたことと無縁ではない。彼はこの段階では“what it means human?”への回答ともなるべきものを自らの内に探りあてることができているからだ。しかし、それは、“an unbearable cold like an icy dagger invading his body, all of his parts shivering”を圧倒的な力で感じさせるGinzburgに、“Now I die without helping Isaac” (281) とあるような絶望感に襲われながらの無力な抵抗にしか思えないかもしれない。だが、この激突のさなか、“Each sees in the eyes of his opponent his own reflection.” (Helterman 128)の瞬間が訪れる。ここで、“reflected”、“mirrored” (281) のようにお互いに「鏡」を見ているかのような状態が発生していることを思わせる描写が用いられていることに着目すべきだろう。いわばMendelの“shadows”ともいえるGinzburgとは、長年の辛苦の果

てに内面化されるに至った世界の不条理感や社会の過酷さがもっとも剥き出しの形であらわれたMendelにとっての心の闇そのものであり、この瞬間、Mendelはその闇と真っ向から向き合うかたちとなっているのだ。Mendelはそこに自身の“depth of terror”、すなわち、“What will happen happens. This isn’t my responsibility.”という言葉を受け入れかねない弱さと、また、Ginzburgとしてあらわれた彼の半身“double”としての闇の部分が目にするかたちで描かれた“the extent of his own awful wrath”、すなわち、世界の不条理感や社会の過酷さが自身の心の闇として過度に内面化されてしまっていたことの両方を目の当たりにする。その直観的な自覚の直後に、“He beheld a shimmering, starry, blinding light that produced darkness.” (281 強調筆者) という事態が生じるが、ここでの“he”については、Ginzburgを指すと読むのが一見妥当であろうか。しかし、そこにRobert Solotaroffが次のように留保をつけるのは鋭い指摘だ。

Who is the “he” who beholds the starry blinding light? The story works best if it is Ginzburg, particularly since Malamud brilliantly relates the many light-dark images in the story to the angel of death. But have we for the only time in the story moved into someone else’s mind besides Mendel’s? Or are we to believe that the old man has seen what Ginzburg is seeing (as well as his own reflected image in the angel of death’s eyes)? (69)

実はこのとき“a shimmering, starry, blinding light”を見たのは、“depth of terror”という弱さを抱えるMendelの一面でもあり、“awful wrath”と表現される、内面化された世界の不条理感や社会の過酷さを象徴するMendelのもう一面としてのGinzburgでもあるというべきだろう。鏡のイメージによって示唆されていたのは、この内面世界においては両者は表裏一体だということであり、いずれもが（これを夢として見ているかもしれない）Mendel自身の心理的投影物と考えられるからだ。その意味においては、光を見た“he”とはその両方とも自分の内面世界の反映であることを直観したMendel本人だったのである<sup>6</sup>。このまばゆいばかりの光を見た瞬間に起こったこととは、いわば“breakdown of...resolutely binary, either-or mode of thinking” (Solotaroff 69) であり、どちらの側面も直観的に一気に唾棄され、両方の呪縛からMendelは開放される。ここに至って、Ginzburgに投影されていたものもMendelへの“grip” (281) すなわち支配力、影響力を失う。“What will happen happens. This isn’t my responsibility.”という考え方を受け入れかねない人間の弱さという“darkness”も、また、それを当然の論理として憚ることなく主張する心の闇としての“darkness”も、この光が象徴するものの前に屈し、闇の濃さとはその光の強さの反転に過ぎないという逆説をMendel自身が受け入れたことがここには描かれているのだ。

ここでまたIsaacに「助け起こされた」Mendelは、そのIsaacが無事に出発するのを見送ることになる。このとき、列車の座席でIsaacの顔は“strained in the direction of his journey”と記される。これは、Mendelの内面世界において、Isaacが象徴するものの未来をMendelが確信していること、そして“what it means human?”への回答を自らの内に確かめえたことの裏返しだろう。最後に、“what had become of Ginzburg” (281) を確かめに駅の階段を上っていくMendelにもはや心の闇への怖れはないのである。

## 結.

ここまで、“Idiots First”を複数の相の下に考察してきたが、この短篇の真価は、単一の相の下ではなく、このような複数の相の下に検討することでより一層明らかとなるように思われる。アレゴリカルな設定によって世界の不条理感を浮上させ、そこに巧みに社会的不正義への抗議を重ね合わせるとともに、個人の内面の問題へも切り込む相を潜ませるといった構造を持っていることが見えてくるのだが、そのいずれの相においてもまさに“Malamud’s most heightened plea for human possibility” (Solotaroff 70) が貫かれていることを改めて確認できるのである。特に、第三の相、つまり、内面世界の相に着目することで、この短篇におけるラストの衝撃的な逆転を新たな観点から考察できよう。

Malamudはこの短篇を発表した5年後の1966年に、実際に起きた冤罪事件を基にした一種の歴史小説である長編 *The Fixer* を出版する。その性質上、当然ながら、“Idiots First”とは作風において大きく異なっているのだが、実はこの小論で検討してきた内容との共通点を多く持っているのである。*The Fixer*という重厚な長編小説へと深化、発展していく問題意識をこのミニドラマがすでに内包していたという点からも、“Idiots First”は改めて再評価されるべきであろう。

## Notes

1. “Idiots First”からの引用はすべて *The Complete Stories*. による。以降、ページ数のみを記す。
2. Bryantはさらにほかの二つの論文においても、この小説における時間と時計に関する分析を行い、Mendelがいかに追い詰められていくかを論じている。(Bryant “Malamud’s ‘Idiots First’.”、“The Tree-Clock in Bernard Malamud’s ‘Idiots First’.”)
3. Malamudの友人であったClark Blaiseが“Idiots First”について言及した言葉として引用されている。
4. この小説における心象風景的な表現の最たるものだが、Bryantは、一瞬のうちに太い枝と細い枝の位置が逆転するこの部分の描写にも、時計のイメージを読み取り、Mendelの恐怖心と焦燥感を指摘している。Bryant “The Tree-Clock” 53-54.
5. テーマ的には普遍的な要素を持つこの短篇の登場人物がすべてユダヤ人ないしはユダヤ系であると思われるのは、この短篇がイディッシュの古い民話に着想を得たものであるという理由だけではなく、ここで描かれた世界がMendelの内面を映し出すものであるということと深い関係があろう。
6. Malamudは時として、代名詞の指す対象に曖昧さを持たせることで作品にある種のインパクトを与えることがあるように思われる。ほかの短篇における代表的な例としては、“Behold the Key”(1958)のラストシーンが挙げられる。

## Works Cited

- Abramson, Edward A. *Bernard Malamud Revisited*. New York : Twayne Publishers, 1993. Print.
- Astro, Richard, and Jackson J. Benson, eds. *The Fiction of Bernard Malamud*. Corvallis : Oregon State University, 1977. Print.
- Bande Kieft, Ruth M. *Eudora Welty*. New York : Twayne Publishers, 1962. Print.
- Bellman, Samuel Irving. “Women, Children, and Idiots First : Transformation Psychology.” *Fields* 11-28. Print.
- Bryant, Earle V. “Isaac’s Arithmetic : A Note on Malamud’s ‘Idiots First’.” *ANQ* 8.3(1995) : 26-29. Print.

- "Malamud's 'Idiots First.'" *Explicator* 55.1(1996) : 43-45. Print.
- "The Tree-Clock in Bernard Malamud's 'Idiots First.'" *Studies in Short Fiction* 20.1(Winter) (1983) : 52-54. Print.
- Davis, Philip. *Bernard Malamud : a Writer's Life*. Oxford : Oxford UP, 2007. Print.
- Field, Leslie A, and Joyce W.Field, eds. *Bernard Malamud and the Critics*. New York : New York UP, 1970. Print.
- Friedman, Alan Warren. "The Hero as Schnook." *Fields* 285-293. Print.
- Helterman, Jeffrey. *Understanding Bernard Malamud*. Columbia, S.C. : U of South Carolina P, 1985. Print.
- Hershinow, Sheldon J. *Bernard Malamud*. New York : F. Ungar, 1980. Print.
- Hicks, Granville. "His Hopes on the Human Heart." *Lasher* 11-15. Print.
- Huttar, Charles A. *Imagination and the Spirit ; Essays in Literature and the Christian Faith, Presented to Clyde S. Kilby*. Grand Rapids : Eerdmans, 1971. Print.
- Lasher, Lawrence M, ed. *Conversations with Bernard Malamud*. Jackson : UP of Mississippi, 1991. Print.
- Malamud, Bernard. *The Assistant*. 1957. New York : Farrar, Straus and Giroux, 1980. Print.
- *The Complete Stories*. New York : Farrar, Straus, and Giroux, 1997. Print.
- *The Fixer*. New York : Farrar, Straus and Giroux, 1966. Print.
- *The Tenants*. New York : Farrar, Straus and Giroux, 1971. Print.
- Richman, Sidney. *Bernard Malamud*. New York : Twayne Publishers, 1966. Print.
- Roth, Philip. *Reading Myself and Others*. New York : Farrar, Straus and Giroux, 1976. Print.
- Salzberg, Joel, ed. *Critical Essays on Bernard Malamud*. Boston, Mass. : G.K. Hall, 1987. Print.
- "Introduction." Salzberg 1-22.
- Siegel, Ben. "Through A Glass Darkly : Bernard Malamud's Painful View of Self." *Astro and Benson* 117-148. Print.
- Solotaroff, Robert. *Bernard Malamud : a Study of the Short Fiction*. Boston : Twayne Publishers, 1989. Print.
- Ziegelman, Louis A. "Ginzburg Revisited." *Modern Language Studies* 12.4(1982) : 91-93. Print.